

平成 17 年度病虫害発生予報第 2 号

平成 17 年 4 月 27 日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	苗立枯病 ばか苗病 イネミズゾウムシ	やや早い	やや多い やや少ない やや少ない
果樹	ナシ	黒斑病	平年並	平年並
		黒星病	平年並	やや少ない
		赤星病	平年並	やや少ない
		クワコナカイガラムシ	平年並	やや多い
	カキ	カメムシ類	平年並	やや少ない
	ブドウ	灰色かび病	平年並	やや多い
べと病		平年並	平年並	
野菜	ネギ	べと病	平年並	平年並
		さび病	平年並	平年並
		ネギハモグリバエ・ネギアザミウマ	平年並	やや多い
	スイカ	菌核病	平年並	平年並
		つる枯病	平年並	平年並
	スイカ・メロン	アブラムシ類	平年並	平年並
タバコ	ハダニ類	平年並	平年並	
		黄斑えそ病	平年並	平年並

[参考]

気象予報（抜粋）

1 か月予報（4月23日～5月22日：4月22日、広島地方气象台発表）
向こう1か月の気温、降水量、日照時間は、いずれも平年並の見込みです。

< 可能性の大きな気温経過 >

期	間	平均気温
4月23日	～ 29日	平年並
4月30日	～ 5月6日	平年並
5月7日	～ 20日	平年並

普通作物

【イネ】

1 苗立枯病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 一部でリゾプス属菌や細菌による立枯症状が散見されている。

イ 平成16年産種子は、倒伏等により苗立枯病の病原菌が付着している可能性がある。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 予防防除を基本とし、主要農作物病害虫防除指針を参考に防除を行う。

イ 近年、リゾプス属菌やトリコデルマ属菌による苗立枯病の発生がみられるので、育苗環境を清潔に保ち、育苗中の温度管理及び水管理に注意する。

ウ ムレ苗が発生した場合には、タチガレン液剤の500～1,000倍液を箱当たり0.5リットルかん注し、夜間の保温と昼間の遮光に努め、苗の回復を図る。移植可能であれば、早めに本田に移植する。

2 ばか苗病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、育苗センターにおいて本病の発生はほとんど見られていない。

イ 昨年の本病の発生はやや少ない状況であり、種子の保菌率はやや少ないものと思われる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 浸漬処理は以下のことを十分注意して行う。浸漬処理時の薬液量の不足、あるいは低温時の処理で効果が低下するので、十分な薬液量を確保し、液温は10℃以上を確保する。消毒後の浸種は停滞水中で行い、水の交換は原則として3日間行わない。なお、水温が高い場合など酸素不足になるおそれがあるときは静かに換水する。

イ 本病とイネシンガレセンチュウはそれぞれの防除薬剤の混用による種子消毒で同時防除が可能であるが、その場合には薬剤の濃度に注意して、浸漬処理を行う。

ウ 育苗期間中に本病による徒長苗がみられた場合には直ちに抜取り、本田に移植しないように注意する。

3 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 やや早い

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 4月21日現在予察灯への飛来は確認されていない。(平年初飛来日、5月10日)
- イ 4月25日現在、東部の早期コシヒカリでは、成虫のほ場への侵入は認められていない。
- ウ 越冬成虫の飛翔活動に必要な有効積算温度は、平年と比較して7日程度早く推移している。
- エ 気象予報によると、向こう1か月の平均気温は平年並と予想されている。
- オ 前年の越冬世代成虫の誘殺数は平年と比較してやや少ない。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 育苗箱施薬の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守って1箱ずつ丁寧に粒剤を施用する。特に、箱当たり施薬量が不足すると著しく防除効果が低下するので注意する。
- イ 育苗箱施薬を行っていないほ場では、成虫の発生状況に十分注意する。成虫の発生量が要防除水準(0.5頭/株以上)を超えた場合には、粒剤等でただちに防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場における4月上～中旬の孢子飛散数は、ほぼ平年並であった。
- イ 本年のナシ園における病芽及び枝病斑などの越冬菌密度は、全般的に平年に比べて低い。一部のナシ園では、越冬菌密度が県平均に比べてやや高い園が認められる。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 小袋掛け終了までの薬剤散布の間隔は5～7日程度とし、特に小袋掛け直前の防除を徹底する。
- イ 薬剤はベルコートフロアブル1,500倍液、ユニックス顆粒水和剤47の1,500倍液、有機銅フロアブル1,000倍とポリオキシソルボンA水和剤1,500倍の混用液の混用液などを使用する。
- ウ スピードスプレーヤによる防除地域では、往復走行または縦横走行による散布を行い、散布むらが無いように注意する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場における4月上～中旬の果そう基部病斑からの分生子の飛散数及び病落葉からの子のう胞子の飛散数は平年を下回った。
- イ 近年は、E B I 剤による薬剤防除が徹底されており、本病の発生は全般に少ない。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源となる果そう基部の病斑を早めに切り取る。
- イ 薬剤は、落花期にE B I 水和剤（スコア10又はマネージ）4,000倍とジラム・チウラムフロアブル（ダイボルト又はパルノックス）500倍の混用液、摘果期にベルコートフロアブル1,500倍液、ユニックス顆粒水和剤47の2,000倍液などを散布する。

3 赤星病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 4月16日時点でビヤクシン上の冬孢子堆の成熟度は100%であり、小生子の形成開始時期はほぼ平年並であった。
- イ 近年、住宅の生け垣などにビヤクシン類が多く使われているため、住宅地に近いナシ園では本病の発生がやや目立っている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤は、落花期にE B I 水和剤（スコア10又はマネージ）4,000倍とジラム・チウラムフロアブル（ダイボルト又はパルノックス）500倍の混用液を散布する。
- イ 例年発病の多い園または初期病斑が多く認められた園では、5月上～中旬にE B I 水和剤を追加散布する。

4 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 4月26日現在、越冬卵のふ化（平年：4月30日）は認められていない。
- イ 前年度、本害虫による果実被害はやや多かった。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並と予想されており、越冬卵のふ化最盛期は平年並の5月4日前後と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 昨年被害の多かった園では、必ず2回の防除を行う。特に、越冬世代は、第1世代および第2世代よりふ化時期が揃いやすいので防除を徹底する。
- イ 多発園では、1回目の防除はふ化最盛期の5月4～9日、2回目はふ化終期の5月10～15日を目安に行う。少発園では、5月10日前後に1回防除を行う。
- ウ 薬剤はスプラサイド水和剤1,500倍液及びアプロード水和剤1,000倍液などを使用する。

5 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 県下におけるクサギカメムシの越冬成虫量は平年に比べてやや少ない。

イ 4月25日現在、予察灯への誘殺は認められていない。

ウ ナシの生育がほぼ平年並であることから、越冬成虫のナシ園への飛来時期は、平年並の4月下旬～5月中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 特に山間地、民家近くのナシ園で例年発生が認められる園では、幼果期の防除が必要である。

イ 摘果期～小袋掛け期の幼果を加害するので、この時期に果樹園への飛来が認められた場合、直ちにジノテフラン水溶剤（アルバリンまたはスタークル顆粒水溶剤）2,000倍液などを散布する。

[カキ]

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月中～下旬の強風害により葉の傷みが生じており、傷口からの病原菌の感染が多いことが予想される。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 病原菌は低温・多湿条件を好むため、天候不順が続くと、本病が発生しやすい。また、強風などによって若葉が傷ついた場合に突発的に発生しやすい。

イ 西条、伊豆などの品種では、本病の発生が多い傾向にある。

ウ 防除薬剤は、ゲッター水和剤1,000倍液などを散布する。

[ブドウ]

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、本病の発生はほとんど認められていない。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 病原菌は低温・多湿条件を好むため、開花期が天候不順になると、本病が発生しやすい。

- イ 開花前～落花後にパスワード顆粒水和剤 1,500 倍液、スイッチ顆粒水和剤 3,000 倍、ゲッター水和剤 1,500 倍液、ポリベリン水和剤 1,000 倍液、ロプラール水和剤 1,500 倍液及びロプラールくん煙剤 500 g / 10 a のいずれかを使用する。
- ウ デラウェアでは、ジベレリン処理前 5 日間と処理後 3 日間は薬剤散布できないので注意する。
- エ 施設栽培では多湿条件が続くと発病が多くなるので、早朝の換気を行って施設内の湿度を下げるようにする。

2 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 4月中旬現在、本病の発生はほとんど認められていない。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 開花期以降、天候不順になると、本病が発生しやすい。
- イ 薬剤は、展葉6～7枚にアリエッティC水和剤800倍液、落花後(小豆大)にアミスター10フロアブル1,000倍液またはストロビードライフロアブル2,000倍液を使用する。
- ウ 発病果、病葉は見つけ次第、取り除いておく。

野菜

[ネギ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 4月下旬現在、本病の発生はみられていない。
- イ 本病は、低温の15℃位で降雨が続くと発病が増加するが、気象予報によると、向こう1か月の気温、降水量ともに平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病後の蔓延は早いので初期防除に努める。
- イ 5月上旬(中山間では5月下旬)からアリエッティ水和剤800倍液、ダコニール1000の1000倍液を10日間隔で散布する。その後発病を認めたら、極初期にフェスティバルC水和剤1,000倍液を散布する。さらに発病を認めたら直ちにリドミルMZ水和剤1,000倍液を散布する。

2 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、春ネギでは平年並の発生状況となっている。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温、降水量ともに平年並と予想されており、夏ネギ、秋冬ネギにおいても平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除は、孢子飛散がはじまる4月下旬頃からオンリーワンフロアブル

1,000倍液、バイレトン乳剤2,000倍液、ラリー乳剤4,000倍液等を散布する。

イ 発病がやや多くみられてきた場合は、バイレトン乳剤またはラリー乳剤にカリグリーン800倍液を混用散布する。

ウ なお、べと病の発生もみられる場合は、アミスター20フロアブル2,000倍液を散布する。

3 ネギハモグリバエ・ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、ネギハモグリバエ、ネギアザミウマともに平年に比べやや多い発生量となっている。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温、降水量はともに平年並と予想されており、引き続きやや多い発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 生育中のネギに対して5月はマラバッサ乳剤1,000倍液、ランネート45DF1,000倍液、モスピラン水溶剤2,000倍液などを散布する。

イ 苗の移植時にはアクタラ粒剤5の6kg/10aの植溝土壌混和、オンコル粒剤5の6kg/10aの株元散布、またはモスピラン粒剤6kg/10aの植溝土壌混和などの処理をする。なお、その後生育中の粒剤散布にはダントツ粒剤、ベストガード粒剤などを予定する。

ウ 地床育苗では、草丈20cm未満の苗でハモグリバエによる被害の影響が特に大きいので、5月上旬までに薬剤防除を徹底する。薬剤はガゼット粒剤400g/a、アドバンテージ粒剤400g/a、またはジメトエート粒剤600g/aなどを苗床に散布する。

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、発生はほとんどみられない。

イ 本病は、やや低温の15～20位で多湿条件が続くと発病が増加するが、気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量ともに平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。咲き終わった花卉は早く摘み取って除去する。

イ 薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、ジマンレックス水和剤600倍液、スミブレンド水和剤2,000倍液などを散布する。

ウ 曇天が続く場合は、ハウスではスミレックス、ロブラールなどのくん煙剤を使用する。

2 つる枯病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、本病の発生はほとんどみられていない。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量ともに平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。

イ 本病は株元を中心に発病が始まるので、株元にも薬液が十分かかるように散布を行う。薬剤は、ジマンダイセン水和剤600倍液、ジマンレックス水和剤500倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール1000の1,000倍液、オーソサイド水和剤80の600倍液などを散布する。

[スイカ・メロン]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場(東伯郡大栄町)における黄色水盤への有翅アブラムシ類の初飛来は平年並の4月15日であり、その後の誘殺数も平年並である。

イ ハウス栽培スイカにおけるアブラムシ類の発生量は、平年並である。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温、降水量共に平年並と予想されており、平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 初発生に注意し、初期防除を徹底する。

ウ 薬剤は使用基準に従い、スイカのハウス栽培では、交配前にミツバチへの影響のないチェス水和剤3,000倍液、交配後はDDVP乳剤50の1,000倍液等を散布する。トンネル栽培ではツル引き誘引時期に、チェス水和剤3,000倍液等を散布する。交配1週間前には、バリアード顆粒水和剤4,000倍液、着果後はDDVP乳剤50の1,000倍液等を散布する。

メロンではチェス水和剤3,000倍液、DDVP乳剤50の1,000倍液、モスピラン水溶剤8,000倍液等を散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬から4月の気温は平年並に推移しており、ハダニ類の畦畔部からの移動時期は平年並になると予想される。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温、降水量ともに平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 畦畔雑草に対して、4月下旬までにハダニ類に対して効果のあるハービー液剤などの除草剤を散布する。

イ ハウス等ですでに発生がみられる場合、薬剤の使用基準に従い、スイカ、メロンともに発生初期にニッソランV乳剤1,000倍液、バロックフロアブル2,000倍液等を散布する。多発した場合はコロマイト乳剤1,000倍液などを散布する。

ウ ミツバチ交配を行う前には、ニッソランV乳剤(ミツバチへの影響7日)の使用は避ける。

[タバコ]

1 黄斑えそ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 本病を伝搬するアブラムシ類の発生時期は平年並で、発生量も平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となるジャガイモの掘り残しイモを除去する。

イ ジャガイモは透明寒冷紗等で被覆栽培し、本病のジャガイモからタバコへの伝染を防ぐ。

ウ タバコとジャガイモで同時期にアブラムシ類の防除を行う。薬剤は、タバコではベストガード水溶剤2,000倍液、ホスクリン1,000倍液、ジャガイモではランネート45DFの2,000倍液、アドマイヤー水和剤2,000倍液などを使用し、定期的に散布を行う。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。
詳しい内容は、独立行政法人 農薬検査所の「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.acis.go.jp/>)

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守しましょう。

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報、現地巡回調査結果やフェロモントラップ調査結果（ネキリムシ類、果樹カメムシ類）などの指導情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : byogaichu@pref.tottori.jp 又は kttr0301@sp.jppn.ne.jp

今回の予報発表は、5月12日（木）の予定です。